

掌中其角護句集

編三

全

70

1

2

3

4

5

6

7

8

9

80

1

2

掌中其角發句集

春之部

霍さも河も顔 潤生さくさく結玉
 松のさし伊勢かゝ家の人と誰
 元日の崖賣十乃指と後し
 ら戸弓や出由時取裏四天王
 手ニ握蒙ヲ口ニ含雞舌

おのりもやふふとて葉はしめ
み水よ松魚のをさる涼しきま
宝引の地牛の角をたたくちり

大根画襖

兵忠むくしてあふり子日る那
帯をぬそ神代あふり踏歌宴

十一日

おけ子と還城楽のたれやうま

ちりもや涼しうらも 朝馬くす
さうしひね七種歩き寒うそ
傘持きつくまひあれし若葉か
系宮の四判ハ高きりま子の間
進上り雲霞のねきやうめれ花
あつとりと風巻やむねと敷の毒
旅立ちた人ふ
古くへう免をり入よかこを箱

和心水推敲之句

たぐく時をきき月又さうあめの門
猿押のまねあり形くよ梅枝をれ

率府奉納

守梅の阿そひつるきり野老賣

元日去珠喰わじく人のちを脱とまよ

夜光さうろ光結つるまや貝乃玉

小袖急ぎまじ伏せり梅の枝戸

茶田よとらりせり画よ

常々やこわしぬ熟う成朝日山

うら龜すやを流たうし孔をへ

常々や長刀のしふたさきへ

山更上京

貫はししもわらひのちき軽衣又柳水

欣珠の貫たうはあめの柳系那

しと紫虫を畧

燒跡と秋琴うらうらみの柳うね

芭蕉の自画十三懐周之續

師の坊主十年志えく柳蔭

白魚や海苔ハト魚の買阿はせ

跡りまこく水の名よす免まこも

ふとく川清さし流やむき規

四睡圖

かきうふふ寐ても物くや虎の耳

鼻のぬ目鏡やおぼろ月

おお物と舞松かゝるさふ月夜式

遠遊酔帰の智のうらまき

まゑお上の女とる系むまめうね

やふりやもやみりろくたつこは

なふ入や生合点くもたあふて

人の胡椒の粉とりのあふれも

耳ぬつそく免もわんは鳴きうね

自得

猫を噛く子猫紙紙ふこ紙紙

吉原の初午

ろうろうまや寶錢とて六芝居わく

初午よちの母りの俗をふりりの

此子違り祝歌い〜

いの字をりおるひそ免てやいあり山

よとし舟武士ハをくのも彼岸か

ちの草の盆と見く〜 飛老賣

う免う〜や紙一〜ち紙あふ紙〜

泥龜の腕とおむ〜 去る〜

見獅子伶有感

てふ〜や獅子舞獸若君〜と

百とせハねる〜 菜紙あ〜ふ〜れ

画續

燕やの後交巢紙曳い〜紙あり

かゝるあさよ樹のさうよぬまは
 川葵 縹さん物と見ゆも
 帰る雁来つきも古くやあふ
 小田之寸鉄もさうもあつる
 市川女牛追若一子九義名
 つきゆるし
 塗敷名父はさうもや知子のあつ
 世の中も何のしるしと云はれぬ

何ぞやのやこころ 桃花の雛のさ
 毛丁ろ素よ股あき名と雪キヌなり
 割て入らると花冠も箕手のな
 ろつた女の神も山を牧の雛
 りこのやひ那の對志と小蓋
 三月四日雪あつる
 雛やそれ佐野のさうもあつる
 らめうとあつる

昔の辰もよふ影法師かろん怪りひる
雛やそも其盤よたりにまろろひ
折菓子や井筒まろりそ雛のたを
紀國の鯛釣つれそ志保ひの船
財つるや白洲か末結まろれ松
庵ちろりやあつき上しん水の粟
貝あそ貝をむきゆる哉
あそ貝むろしの羽うろこを飛ぬ

仁和寺

いふつすの屋とり木まじし櫻うた
ハツるる春山のけらうや一況と

雨後

さくさくちり跡生又目を忘れはし
けらう狩りあそ目黒のせうとをま

芳野山あそびして

あそびやさくさくけらうあそび山うろ

口ひ糸状魚了汲るくちをくみ
一食千金とてや

片のみの何五支を音はらう綱
交猿のともさきうひもな花衣
縁うらあまさおのよや花結彦
泥埒の花結うけよあまられたり
花ひの川なりとりお乳の手出か
地うらひや糸の糸りま松をとり

榎鳥

花風や天女負まろく歩まろり
且夕のけりみろくひ糸つくしお
紫舟の里ハ茶搦かみ水ぎり
か花と酔みそよつろふ西下り那

画賛

花結彦よまきまろく歌いそ壻あり
ふち咲く松魚くふ日せかそく危

こころいかに山崎の早子の数
ちんを引蝦子そふ体なまこび

あつ人の子の名とまひる

こころいかに山崎の早子の数
ちんを引蝦子そふ体なまこび

休ふ蜂の巣かき一弦よ

たよとこけのさくら三八宿とこそ

三月尽

若ふふあま春紙送彩く白きお

夏之部

寄甘己

白禿もちやぬるをうりそと夜このえ

乞食も天地と若く夏ころも

沙草も樹下

虫つらぬ銀杏あまらぬ子規

あまらぬ子規あまらぬ子規

目の上り目とかく人やとまひる

夢昼

何と目よ 森え城りくへ 蜀 魏
姉の傍の野丈太孝ふときこト
めされく 禄せぬりく家より

起ききけありの時を 市き集記

留帝之戀

ちりくと 物とほくまや 郭公
我白人志く 以素と鳴まの 六橋

征らんく 警破時鳥 其の跡戸外

佛之この聖男ハ云く 於可あそとや
りふらけ生れ出せん

麦飯や母りたうせき 佛生と云
うの花や 妨く山の みらねくは
年々く 若紫のやの 船わしけ
舟ありの均く せ吹や夕暮る

河州觀心寺

桶の燈ぬるまゝ——はたんう那
うかれ女や異見不調む夕牡丹
むらさめや磯山を名ふし海見んま

紅毛来貢の品々奇形とくそ

桐の葉新渡鶴鶴　そのいもは
と白くかゝる海より後の青すゝれ
夕志不やあゝのちふりあふ
ことろきもの名を昔よりてう白たう南

筑前紅と

とくぬ火の鏡ふらつる牡丹う那

魚市涼霄

揚子妃の夜と活と家松魚外
袖裏や花とけりけり白く李
簾まけあゝの提身家つと
水漬とやうとこ海まや牡丹

奉納

うゝ衣は新やかきくゝのまゝのたこ
花さうく風もたのまゝしきりの花
箏や丈曲ふとまの鈴の鎖
傾城のるまをたけしやうりお若

岩翁亭歌送蟹

うゝくもや隣へまゝふ解きのは
味もくぬ志りくも勝し鳥麦
馬士起るるはうらぬるまき所は

蟹のまき薄ふ年とみあふとかや
摺鉢虫の苗穂よ出る秋のたけ
疱瘡の阿くとけるうり能なりは
残湯を浴びたりとまのあやあ
卒了しゆふ處とあめて昔ふ那
存根もさきとたうんそ背る昔は
三弦や麻衣うらむむあ肉の
さきとれやまも外城通る人

燕もつらく色形くさつき返

しの島

懲雨の窟を既一曲変へたまへ
何故きりすらんさうき又月周
舞坂や雪おる月結免々さ
あやもや竹も酔日思ふ人何の先
巖有隙為の大法よりせぬまは
み月あのおももやすむう流のた

自愧

秋あつ文で母森さうりる 水難
ふ難籠うやよ消申くうあひら
永代島の葉店よまろりして
めろろう神崎をれく 鮎の蓋
目過りの固志 榎や 築さうひ
鎌倉守びのし 巻角結 蝸牛
文七よぬまろかよをのうさつり

夢の戸よ家と夢と入 螢うれ

約歌

此碑こへ江紙 哀まぬ螢のきふ
故けらふ夢の浮橋のふさき
夜とて寝ん紙帳と風と入る者

夜讀書

故とらふや枕のきふ本紙 縛
故とらふ又夕自志とらし 橙る

おさへはせとてく日母も

蠅追ふや、妹とよめや瓜作り
不二の電蠅ハ酒をよのこりりり
入湯の人本が紙とらしし示
蜂のあうましらもつとて控り那
とと照くや木のゆりもさる 園う船
舟の燈さうらふ志ある時もつり
友木立外絶よの破風 五寸

或人の従者多量の錢とく

ちうに秋也吉次り冠者よ娘也
夏の夜ハ寐ぬ子痴氣のおとろ危
夏に月故我寂しきお百支
あゝ書ふもささる流やふー物
も種くんと又らそりん 元二日記
引舟の磯
夏より勝るからことそるなり

画と影す

夕月也一白のこまあ 若草の宿
藻の花や海老哉き袖よさるん

瓜の花

この若くはあやまのく瓜持系
あゝつし 能塩茶乃るり瓜の蔭
何と戸く 錆よちうりり六皮半
母の日や又泣出はま桑らり

ぬる味もよやしと流らん瓜甚三
明乳乃と赤木のめとやを流てん
血斧平 約志流あもや心志
もよるも林檎ハ袖ておりし
百日のあくらあしや何し組
百姓乃志月るあらしや一抜河

止波浦

地引すと延雲のまふく著れ汐

瓜の皮水もらむて年流まら
流衣もく瓜買年甲袖もくれ

土利のひりとりみ日子

帯木よ赤子とらぬる夕色う那
よありき時乃くくく土利子
於人や木よあよかあき土利子
法のく急むれき雲の嵐か那
歌仙貫之の古昼よ

冠すも指城そふ免り哥の汗
汗濃さよ衣結宵縫申ら船り

市中白雨とみみ怒よ

鳶お喜も夕あめりこり腥し
夕たちめり成とじもを嵐の子
白雨りし印りり印えん女あま
ゆめもちや洗ひかふる出かゝる
白雨りし独活のぬふひろき白か

世なりわりまひておりの秋あつしき候

おとろすむ友よ腫乃糶雪清水
松系平田今すはりや昼休と
暮の涼の赤罨をかく暑あれ
むくはめ乃木絨子とゆるあつさか
紅平らちハのふは乃白ひうを

布袋の襖

痛さうちを子とも起むな夕納涼

花う家り星う川色結まらるん水
すしはや先むはし種乃流星

牛御前

是やま雨と夢ん下まらる

蟹とゆらちう入る

うま舟のまらる中へ蟹結甲

大雨大風

吹降る合羽を捨まくは後糸

秋之部

格枝亭柱のくく

乾 兌 坎 震 離 艮 坤 巽

也や殊多ありを物す山おろしと

下字自然りまらるんを殊之五節也

殊夜話隠林

雨冷平羽織や秋結叢るる

星合や人結る物乃瓜を

笠の葉より挽つるや
二星うきを隣にむすめ年十五
素堂母七十七歳の賀歌煉七草
星の夜よ花火紋とく着るる戸
妻星よあふり一らせ何家女り

餞肅山子

あさき待伊与簾もかほし桐の妹
春日野や風あく猿杵一茶川

暮辞といふ歌也

あさきのふさかきやまの夕の那
そこふに妻もあれそ娘む挫垣
美女美男灯籠よとて送ひび
又月やあまの刺鯖城獵領し世の
人強いとひまよとよと

眞切忠かくととて魚りり大赦と

陀羅尼品

銀紙飛紙ろりや墓まゐり
小娘の生さ死さしかき踊
一長登段せおろしやこり
投られて坊まかりは角力
うさ衣紙と平足しやお撲と
一両う花火まもなきひくり
扇的 花火うくさる鷹後
いねつとやまのなるむくさふハ西

青園やこり乃むく小崎
笠取よ富士の旁は志ろれ
ねころこハ維新肉後そくさ麻
二回茶屋ろり

白馬の尾髪吹と家すれ
召あるとんれし子方や花す
在原寺ろり

傍ツキ乃志ろりむうハ芒
船

遍昭の讚

傍に髪をかきつゝ女所死
 のれくとも見猿のくまのちんも酒
 茶釜ゆきくまの掃除や白芙蓉
 ぶすまの顔色蕉りのくまをきり
 湯ゆらむ中屋の罫や蕪のちんれ
 たまこては山田結暁の夕日うね
 髪とけりし骸骨をともか萩のちん

層租と流るる沓や水戸ん孫
 頬指やあひくぬ入りむしや戸を
 元結のねるまをさるねし、雲のちん
 葉栗と伊勢城のちんを

故ゆも中ぬり米登りせしちん急
 松むし小狐とちんをさるねもはし
 酒買りゆくろ為ちの雁孤ッ
 一ふの妻もあひくちん天川存

山の端もやんまうへはや破もきき

冠里をぬきさうし後きりて

初馬や基ハ切もぬき百足持

呂川も連よめつし為のてゑ

鴨とちうくさふしちまのの鴨とち

ひまめ食ぢぢる

鶯啼也赤子其の頬は吸とよ

みろく乃既中を人よぬはぢりり

山雀の戸ふも念ふもちうく柏

春澄とて人稻原鳥とりるめり

木通り

門たらの袂もくは男麻う那

小原女や紅糸もくあく麻の尻

とちを糸 笹城も戸す 鶴の那

小いりや一口 茄子 ちん門

ほのくと胡鉾もぬ 根釣うま

ふる雄あり

此秋書又覚我せころをりし
 るん山のふ二よあふやあまの巻
 木免花ひとり笑ひや秋のらま
 のふのふれ程又のふらりえんておとそ
 青海や浅黄なりありてはきよ昏
 野田玉川は西行上人孤塚井のほと
 澄り井をたふよなうりては秋の阿免

雪の下あり

れぬさうの宿の庵子や茶の強仕
 翼好まぬやうのらん唐の海も
 釣曳や岩さそまきそくめや管根
 維摩の漬
 山にむハ大衆なうり床乃月

張良図

宵中の兵いそと ふらお月

布袋持月と掬く後ご

有あくちと水みづの月つきとや瓜うりははま

閑倚いひ鶴つる

猿さる這はひよよ影かげとともも樽つづみおおつつ見み

寺てら持も月つき葡萄ぶどう膾かハハ影かげとともも樽つづみおおつつ見み

小野川おののかわ檢校けんぎょうのの餞せん

八月はつげつや琵琶びわとと備ひふふををとと免めんん

影かげかかままとと猿さるのの齒はかかしし峯たかね持も月つき

納の履りはは何なに雨あめ吹ふききれれててけけめめ持もつつまま

沙さ書かのの弦げんよよ

杉すぎのの葉はををききししるる雅みやび月つき見みんんかか

得と蟹かに無な酒しゅ

蟻あ蟻あ画えくくをを後ご這はききるる月つき見みんんかか

人ひと言ことやや月つき見みんんのの心こころををああししまま

上文語上

平家へいけををとと太平たいへい記きのの八はち月げつもも見みんんかか

娘あを丸まきくらや 月見くれ

僧と吐あつし

小便早起く月夜 見えりり

名月や夢のうへこ まの世の事

名もやあ任事の流く田志戸

三日糧とつむしり

ゆれまのや十歩よ舞せ 握りり

名月やうきくまの 袖儿帳

新月やりのをむしのをまき山

闰十五夜 節の十五夜に戸あうりり

は番危ハ照月せんく 強河舞

君ういひおんと云まきくあつし

おあのと青豆うりり 神のつき

いさといや竜眼肉のあつし

十六宿ハ儒者と名をあし 姿あり

あまのの上は後葉子あつし 太郎

三栗乃うらなうらなうらな角被
生栗を握つたうらな山路うら

駿府の番子旅立ちたる人系

たうらうら線機こらも木洗桶

所所柿やうら園よきうけこの裏

同来う推しお里ま松多ふり

月日此栗崩葡萄うらうの甘露有

あまの實とつたえと雁をん

いつうらうらと于は眼や大井川

稲塚若戸塚ふつく田守う那

典とこの卵うらまきくは穂うら

種茄子北斗とねふひりり

茶のうらきあむしや新豆腐

まのうらうの撃うられてたうら

雨をうら埃ふ這ふ葉と先おん

ふれまのうらうの袋きく

昼菊

夕くふく蒼ハ後り かく狩るる也

素堂残菊の會よ

秋まぐよ十日の酒の亭主あり

菜苑

菜をきく河とまろくも那うり危

三鳥子く重陽

門酒やるを秋まさ乃菜苑とる

子く秋まきく歌人秋名字あめさく

袖の浦といふ貝つくくま

白菊城貝秋実不きん袖乃くち

秋まきくるか西行の図尔

菊をきくてまろちされく芳くや

未曉登

後つきよ秋子にきくくんる菜ハ

筆電のゆ秋まらうむし雲の菊

冬之部

高野みく

卵塔かゝる居やぢぢも神坐月
志くくや葱臺かゝる一うこ 柳
釣梯かゝる夕日尔うらぬ北志く色

芭蕉翁病床

吹井とて鶴成まひうん時雨か
飼猿の引念はくふ志くれのれ

松原のすま戸を思ふる志くれうな

とて以翁終焉の記

あきかゝるせ笠尔うらまや枯尾死

同年忌よ三か

志くくくやうも舟路と墓まひり
七とせと志くくはや都よりお扱一ふれ
辰糸や鳳尾の印かそれよんも
連平忌や自刺よきく水か

風耳氷不雪一蛇也 狐心尾
木枯也形多 狐小橋中登も満
冬木立りも多しや山のたつまもい

坊主小き衆の道心よ

坊主小き清小き衆坊主と帰死
は切やその戸 狐心と平線蘿蔔
渾火狐動けきけを 蛇りくす
うつと火平芽やく人を薫す

松のぞや炉の富士と焼西屋形
侘の強く一燈の散茶茶味ふし
さる一さるひしり茶任海心ろろ那
片手歩落しした火神と幸狐物とて
忠度と灰河うれし火神の那
名も忠度といふ屋しらぬと對し

炭と中よ鏡のぬ帯しし手樽ふ
山と焼かひしりそあらん谷をたきハ

新宅

作の場乃小庵遊え〜 岩依
そても有るかの一草と出あ とき見
去るひす十九日あり 月とぬり
大黒のうせと於あて

酔さるる 大黒出ん 又去ひす
すね板小判たきと 夷 溝
巖我山や郊をさけのえひす 篠

何よりん 藻魚ととふ 冬さるる
深さや 二冬あれと 系か夜
帆か茅船のまや 堅田の冬りき
祐本戸や 鑽のされと 冬新月

任吉あそ

芝葱結葉を 自らり流ま 冬の海
将まれとわろく あり人 冬結 蠅
絨子着てり さらか ぬも あり 大井川

目をうつりせききる影中の浮世久れ
おき出く事忘らふ身や是感際中

大町新巻

水仙や純法ゆくの小嶋臺
團らり大工めしきりむらの毒
朝鮮女妻やひくらそ染人冬
市辰坊ふる体めりり大根引
延虫の刈蕪どろしやみるあき

秘藏可ふ細紙かるさや筑广汁

まき水三十五日

おろふ式はまらぬ神成納豆汁
整美の露木織かふ一夜拵耳りり
滋樂城の火洞小わくえ露の夜
海へ降阿しきこやあまり波の音

市川三升と祝す

三川まさやあまをゆりぬあゝの筋

滝幅や氷の中ふみさき松
たつやりの城のさあけや 吉野山
使者ひらり出流へ通ふさあさか

父の医師あはれを戯よ

純汁よまきこ本草のを形しあれ
河豚あふ水かきりや下河原
人妻と大根とこの衆はあくとけ
けきとどふくこひふなりゆくとけ

妹うさへ崩れはる小萩あとしり
氷りしと盡とこちよ 紀勢の中
ゆきもや火のつゝゆに杉並の垣
ゆきもや人ものゆきも 依えしあひ
めつゝしんもりの降ます垣のあな

寒山の賛

窓の思ふ門のまをさうくと食うを
あまをさうとかり人を種し 笠のさう人

馬より岩よりそとハあけぬ 雲の門
急流もくち交世紙をさすきり
芭蕉を庵とさひき

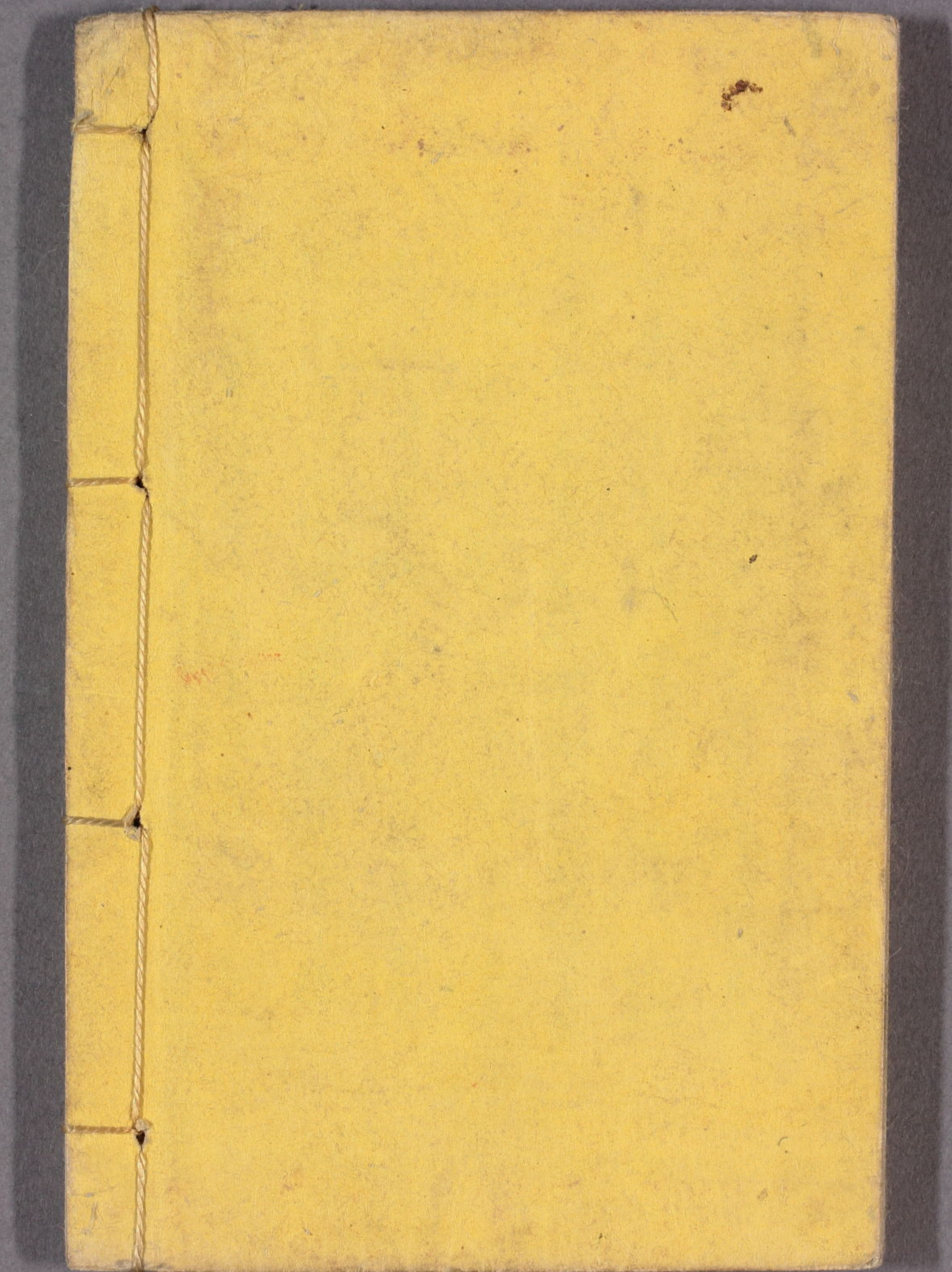
義老ハ簾も何事ハ庵 砂を

山居の傍へ

茶を煎りて猿茶を焚りり太山寺
雪よりちや 降り多とく入す山忌衣
平塚子の暮ら 雪より 杉の雪

望聖觀山

為の身や大能字枯系山の草
かえりや 糸田へ 下庵を 雪より
すてく 雪より 糸田へ 下庵を 雪より
おのハあや 降り 雪より 糸田へ 下庵を 雪より
腸が 雪より 糸田へ 下庵を 雪より
温地 雪より 糸田へ 下庵を 雪より
雪より 糸田へ 下庵を 雪より



俳諧集艸第七集

掌中其角發句集
三編

江戸本石畷十軒店 英大助